

# 17. ボクの世界、ボクの居場所

敦賀市立栗野南小学校

6年 前田 涼野



各務原市立那加第二小学校

6年 大坂 磨秋 岡田 英子 岡田 典子

引原 葵 村崎 優花

僕がここに来て、いったい何日たったんだろう？

ここはいったいどこなんだろう？

ここにいる僕以外の人間は『変人』ばかりだ。バナナだけを食べ続ける男の子。ずっと本ばかり読んでいる女の子。かん高い声で歌を歌い続けているおばさん。わけのわからないことをぶつぶつ言いながら、パソコンのキーボードを叩いているおじさん……。とにかくここで出会った人はみんな変わっていた。

変わっているのは人だけじゃない。ここには『時間』がない。だからどれくらい時間がたったのか、今日が何日で、今、何時なのかまったくわからないのだ。

もちろん僕は聞いてみた。

「ここはどこですか？」

「今、何時ですか？」

けれどまともに返事をしてくれない。それどころか、おかしなことを聞くやつだと言わんばかりに、ばかにした目でぼくを見る。

ここにいる人たちにとっては、僕こそが『変人』そのもののようだ。

僕の名前はカヤ。勉強も運動もいまいちで、これといって人に自慢できるようなことが何一つない平凡な小学六年生。みんなからは『カヤ』じゃなく『カゲ』って呼ばれる。存在感がなくて、暗いからだそうだ。

夏休みに小学校生活最後の思い出になるようにと、両親にサマーキャンプに行くようにすすめられた。僕は気が進まなかったけれど、これと言って断る理由が見つからなかったので、行くことにした。

みんなが水着に着替えて海で泳いでいるのを、僕は岩場の上でぼんやり眺めていた。運動の苦手な僕は当然泳げるはずがない。

何もすることがない僕は、岩場の貝を拾うことにした。貝を拾うことに夢中になって、思わず足を滑らせた。

そこまでは、鮮明に覚えている。けれどそこから先どうなってしまったのか何も覚えていない。

足を滑らせた勢いで、岩に頭をぶつけてそのまま気を失ってしまったのだろうか？ ずいぶん長い間眠っていたようにも感じるし、すぐに目が覚めたようにも思う。ただその眠りの中で僕は夢を見ていた。

真っ黒なやみの向こうから、かすかに声が聞こえてくる。

「た・す・け・て」

最初、何を言っているのかわからなかったけれど、確かにそう言っていた。今にも泣き出しそうな声だった。

何度も繰り返しながらそう言っている声の方へ、僕は近づいて行った。そこにいたのは、僕と同じ年くらいの髪の長い女の子だった。

「ずっと待っていたのよ、カヤ！」

そこで僕は目を覚ました。さっきまで確かに僕は岩場において、海で泳ぐみんなを見ていたはずなのに、気がつくと、そこは草原だった。僕はまだ夢を見ているのかと、何度もほっぺをつねってみた。

「痛っ！」

何度つねっても、やっぱり痛かった。僕はなぜこんなところで眠っていたのか、さっぱりわからないでいた。ずいぶん長い時間、草原の真ん中で座り込んでいたら、突然、ものすごく不安な気持ちが押し寄せてきた。心の中がザワザワして、(とにかく、家に帰らなきゃ) って思った。

そこがどこなのかさっぱり分からないけれど、とにかく歩きだした。

歩いて、歩いて、歩きまくった。けれど、どんなに歩いても何も変わらず、あたりは草原が広がっていた。今まで生きてきて、こんなに歩いたことはないだろう。

(もうダメだ、一步も歩けない) と思ったその時、遠くの方にポツンと家の煙突が見えた。僕は、もう一步も歩けないはずのその足で走った。

「こんにちは」

「……」

確かに家の中には誰かいるはずなのに、何も返事がない。歩きつかれていた僕は、おかまいなしにその家の扉を開けた。中には男の子と女の子、そしてその両親らしいおじさんとおばさんがいた。けれど、僕のことなんかには全く気付かないといった様子で、誰一人僕の方を見ようとしめない。男の子はバナナを食べ続け、女の子は本を読み続け、おじさんは一心にパソコンのキーボードをたたき、おばさんは歌い続けている。

この何とも奇妙な光景に少し驚きながらも、やっと人間に会えたという安心感から、急におなかがすいてきた。(あー、何か食べたいな) そう思って食卓に目をやると、そこには今まで食べたこともないようなご馳走が並んでいた。

「あの一、すみません。何か食べさせてもらえませんか？」

かん高い声で歌い続けているおばさんに向かって聞いてみた。けれど、何も答えてくれない。僕は我慢の限界にきていたので、

「これ、食べてもいいですかっ！！」

と、力いっぱい大きな声で言った。すると、おばさんはとても不機嫌そうな顔をして、「勝手に食べればいいでしょ！ あんたが食べたいと思ったんでしょ。変な子ね」

と言った。僕はどうして怒られなければいけないのか理解できなかったけれど、そんなことをゆっくり考えていることが出来なかった。そして、食卓のご馳走を夢中になっ

て食べた。

おなかがいっぱいになって、ふとある事に気付いた。ここに来てずいぶん時間がたっているはずなのに、ちっとも夜にならない。僕は、恐る恐るおばさんに聞いてみた。

「今、何時ですか？」

「ここはどこですか？」

するとおばさんは、僕の顔をじろじろと覗き込んで、

「本当に変わった子だね」

とだけ言って、また歌いはじめた。

僕はこれからどうしたらいいんだろう？ 途方にくれていると突然、誰かが僕を呼んだ。

「カヤ」

ふと窓の外を見ると女の子が立っていた。僕はその子を知っているはずがないのに、なぜか懐かしい気持ちになった。そして次の瞬間、

「あっ」

夢の中に出てきた女の子だと確信した。僕はあわててその家を飛び出した。飛び出したのはいいけれど、僕はその子と友達でもなければ、知り合いでもない。とまどっている僕に女の子は、

「私の名前はロコ。カヤ、あなたが来てくれるのをずっと待っていました」

と言った。こんなとき、なんて返事をしたらいいのか、頭の中が混乱しすぎて、だまされたままの僕に、

「カヤなら、きっと私を助けに来てくれると信じていました」

きらきらした目でそう続けた。

「君は誰？ どうして僕のことを知っているの？」★

「私は、この国の王の娘です。初代国王が、邪悪な力を封じ込めた開かずのボックスを、私の父が誤って開けてしまいました。その拳句、以前は商売などでにぎわっていたこの国が、このように草原ばかりで、さみしい国になってしまったのです」

と、ロコはさっきとは違ううつろな眼で話し始めた。

「カヤ、あなたは、昔から語り継がれてきた話の伝説の子です。『国が荒れ、荒んだ時には、伝説の子が現れ、開かずのボックスを閉じてくれるだろう』と言われてきました。そこでカヤ、あなたの出番が来ましたよ」

僕は困ってしまった。学校で『カゲ』と呼ばれている僕が、伝説の子だなんて。

「カヤ、あなたはとっても優しい子。人の影で、花に水をあげたり、動物の世話をしたり……。新月に生まれた、初代国王カゲもそんな人でしたよ。あなたは初代国王カゲの生まれ変わり、間違いなく私たちが待ち望んだ伝説の子なのですよ」

この僕が、初代国王カゲの生まれ変わりだということか！！ 周りでは、相変わらず男の子はバナナを食べ続け、女の子は本を読み続け、おじさんは一心にパソコンのキーをたたき、おばさんは歌い続けている。

正直、不安でいっぱいだ。でも、この国を救ってあげたい。ロコにどうすればそのボックスを閉められるか聞いた。ロコは、思い出したというようにポケットから薄くてぼ

ろぼろの本を取り出した。よく見れば、その本は女の子が読み続けている本の最終章ではないか＝

「ボックスの閉め方は、『伝説の子が、呪文を唱え、両手でふたを押さえて閉めれば、一生ボックスが開かないようになる』と書いてあります」

と、ロコが本を読みながら言った。僕はそれを聞きながら、案外簡単そうじゃないかと思った。けれどその時、ハッとした。呪文を聞いていないじゃないか。

「ロコ、さっきの話はよく分かったけれど、まだ呪文を聞いていないよ」

と僕はあわてて聞いた。ロコは、

「どの本にもそんな呪文はのっていないかったわ。きっとその呪文は伝説の子が知っているだろうといわれていましたから」

と、どうしてそんなこと聞くの？ というような顔でいった。僕は困った。でもそれ以上に、さっきごちそうを食べたばかりなのに、おなかがすいて仕方がない。男の子が食べ続けているバナナを分けてもらって食べた。たった一本のバナナなのに、おなかがいっぱいになった。

その日の夜は、ロコの家泊めてもらえることになった。けれどロコに『明日ボックスを閉めにいく』と約束させられてしまった。すごく疲れているはずなのに、あのおばさんが歌い続けているあの歌声が耳から離れない。いったい何なのだろうか。

次の日。ロコは部屋のドアを軽くノックした。

「カヤ、起きて。きのうの約束をわすれてしまったのですか」

僕は、ベッドの上で、自分がどこにいるのか分からなかったが、ようやく昨日のことを思い出した。

部屋から出ると、ドアの前にはロコがいた。さっきから、ずっと待っていてくれたのだろう。ロコは、僕の顔を見ながら、

「よく眠れた？」

と聞いてきた。僕は戸惑いながらも、

「よく眠れたよ。ありがとう」

といった。それを聞いたロコは安心したように見えた。けれど、よく眠れたというのはうそだった。昨日はこの訳の分からない世界に迷いこんで来て、ロコという女の子に出会い、まだそこまではよかった。ロコは、僕が『この国を救う伝説の子』だというのだ。僕は、全く信じられなかった。だって僕は、運動も勉強もいまいちなただの平凡な男の子なのに……。

そんなことを思っているうちに、広々としたホールが目に入った。ロコが立ち止まった。中にある気味が悪いくらい妖しい光を放っている箱が、きっと開かずのボックスなのだろう。僕は、この国の伝説の子。責任の重大さからか僕は自分の顔から、血の気が引いていくような感じがした。

「あそこに行って、両手でふたを閉めてきてください。あなたならきっとできると思います」

僕は緊張して震える足取りで、まるでボックスに引き付けられるかのように一歩また一歩と前に進んでいった。ボックスに着いた。僕は、思い切って手をふたの上に載せた。おかしなおばさんの歌声が、頭の中で鳴り響く。

「ロコ、おじさんのまねをしてパソコンのキーをたたいてくれ！！」

ロコの手動きに合わせて、僕は頭によぎった呪文を唱えていた。そのとき僕は、ボックスが暗くなり始めていることに気が付いた。同時にボックスにエネルギーを吸い取られていくかのように足がふらついてきた。僕はとうとう力が尽きて、床の上に倒れてしまった。

ここは、時間のない国だったが、どれくらいの時間がたったのだろうか……。僕はあたりを見渡すと、きのう泊まったロコの部屋だということが分かった。隣には、ロコが座っていた。ロコは、僕が起きたのを見て、

「カヤ、あなたは無事に開かずのボックスを閉めてくれましたね。今あのボックスは誰も入れない部屋にあります。これでみんなが安心して暮らせるようになりました」

と、にっこり笑いかけてきた。

外に出て、国の様子を見渡した。バナナを食べ続けていた男の子は、畑仕事に精を出して穀物を育てている。本ばかり読んでいた女の子は、人々に役立つ機械を開発するために研究に励み、一心にパソコンのキーをたたいていたおじさんは、学校で先生として子どもたちに勉強を教え、歌い続けていたお婆さんは、家事や育児に励んでいる。国民のみんなが生き生きと働いていた。

ロコが真剣な表情で僕の目を見つめて言った。

「カヤ、ホールに来てください。大切な話があります」

ホールの扉を開けるやいなや、国民のみんなに大きな拍手で迎えられた。みんながロクに叫んでいる。

「伝説の子カヤ、助けてくださって、ありがとうございました。この国の国王になってください！！」

僕が生まれた世界では、これといった自慢もなく、『カゲ』と呼ばれていた。この国の人たちにこんなにも感謝されてとてもうれしい。でも…。言葉がなかなかみつからなかったけれど、ゆっくり、真剣に国民のみんなに僕は語った。

「僕がいなくても、みんながそれぞれの特技を生かしてがんばっているから、もう大丈夫だよ。僕もみんなのように自分の世界でがんばりたいんだ。僕の世界の自分の家に帰らせてくれないかな……」

ロコは、国民のみんなを家に帰した。そして、僕をしんと静まり返ったホールの真ん中に立たせた。

「カヤ、さようなら。本当にありがとう」

ロコは手を振りながら笑顔で言った。僕には、わざと笑顔を作っているように見えたけれど。僕も負けずに手を振り返した。すると、ホールが急に回り始めた。

僕は伝説の子として、ロコとの約束を果たし、僕の世界の僕の家に戻してもらった。

それから数日後。とても驚いた出来事がおきた。

「ピンポーン」

家のチャイムがなった。お母さんが留守だから、代わりに僕が出た。

「だれだろう？」

と、思って、玄関に出てみた。外はロコがいたあの世界だった。僕はとてもびっくりし

た。しばらく様子を眺めていて、僕は気がついた。ボックスが開けられて変わり果てた時とは違い、とても豊かできれいな光景だった。その光景に見とれていると、風に乗ってロコの声が聞こえてきた。

「カヤ、ありがとう！ あなたの言葉を信じて、みんながんばっているわ！」